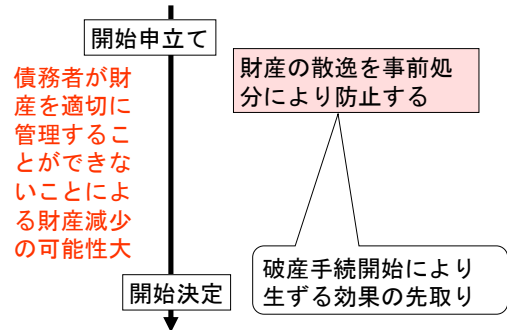


2014年度
破産法講義
2

関西大学法学部教授
栗田 隆

- 事前処分
- 破産手続開始決定
- 破産管財人 (74条以下)

破産手続開始前の処分（事前処分）の必要



債務者についての事前処分

- 他の手続の中止・禁止
 1. 既に開始されている個別の手続の中止命令等 (24条)
 - a. 中止命令 (1項)
 - b. 取消命令 (3項)
 2. 包括的禁止命令 (25条以下)
- 債務者の財産の保全
 1. 債務者の財産に関する保全処分 (28条)
 2. 保全管理人による財産の管理・処分 (91条)

T. Kurita

3

中止命令の対象 (24条1項1号・2号)

破産債権・財団債権となるべき債権の満足のためになされている強制執行等の手続

- 強制執行、仮差押え、仮処分 (1号) (破産手続が開始されると42条により効力を失う)
- 商事留置権以外の留置権による競売 (1号) 商事留置権以外の留置権は留置物の所有者の破産により効力を失う。
- 一般の先取特権 (1号)・企業担保権の実行手続 (2号) これらは、債務者の一般財産を対象としており、その被担保債権は、優先的破産債権になる。

T. Kurita

4

中止命令の対象 (24条1項3号)

- 債務者の財産関係の訴訟手続 破産手続開始前に判決が確定すると、その判決の既判力は、破産者に代わって破産財団を管理することになる破産管財人にも及ぶのが原則であるので、中止の必要がある。破産手続開始後における訴訟手続の中断に関する44条・45条参照。

T. Kurita

5

中止命令の対象 (24条1項4号)

- 債務者の財産関係の事件で行政庁に係属しているもの手続。例：
 - 国税不服審判所における、国税に関する法律に基づく処分についての審査手続 (国税通則法75条以下)
 - 特許庁における知的財産に関する審判手続

T. Kurita

6

中止命令の対象 (24条1項5号)

- 船舶の所有者等の責任の制限に関する法律（船舶の所有者等の責任の制限に関する法律又は船舶油濁損害賠償保障法）による責任制限手続
これは、船舶事故から生ずる一定範囲の債権について、船主等の賠償責任の限度額を船舶のトン数に応じて定まる金額に限定し、その金額の範囲内で平等弁済を行う手続である。この手続により配当を受ける債権も、破産手続が開始されれば破産債権等になる。

T. Kurita

7

取戻権となるべき権利に基づく訴訟と執行

- 債務者の相手方が有する所有権に基づく
 1. 返還請求訴訟は、3号に該当し、中止命令の対象となる。
 2. 返還請求権のための強制執行は、1号に該当しない。
- 破産手続が開始された場合に、破産財団に関する訴訟手続は中断するが（44条）、取戻権に基づく執行手続は効力を失わないことに対応する（42条2項参照）。

T. Kurita

8

中止されるべき手続の特定の必要

- 中止命令の対象となるのは、特定の手続であり、中止対象手続について少なくとも申立てがなされていることが必要である。

T. Kurita

9

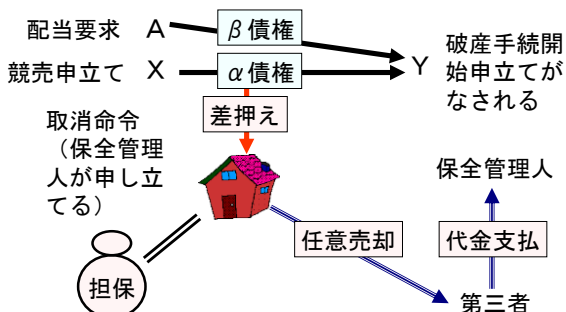
執行手続等取消命令（3項）42条参照

- 例えば、不動産の強制競売の手続が中止命令により中止された場合でも、破産手続開始前に、競売手続外で、速やかに売却する方がよい場合もある。
- その場合に、裁判所は、担保を提供させた上で、競売手続を取り消すことを命ずることができる。

T. Kurita

10

設例



T. Kurita

11

命令の変更・取消し（24条2項）

- 手続の中止命令 この命令を変更し又は取り消すこともできる。中止命令が取り消された場合には、中止命令に係る手続は進行を再開する。
- 手続の取消命令 この命令の取消しの余地はない（取り消された手続の復活の余地がないから）。

T. Kurita

12

不服申立て（24条4項・5項）

次の命令に対しては、即時抗告をすることができるが、その即時抗告には執行停止の効力はない。

1. 中止命令（1項）
2. 中止命令の変更命令又は取消命令（2項）
3. 中止された手続の取消命令（3項）

包括的禁止命令（25条）

- 多数の債権者が債権取立手続を始めている場合、あるいはそのおそれがある場合には、個別の手続中止命令では間に合わないので、包括的禁止命令が発せられる。
- 債権者に不利益が生じないように、債務者の責任財産を確保した上とする。
 1. 28条の保全処分
 2. 保全管理命令

禁止命令の対象と効果（25条）

	新規の手続	開始済みの手続
強制執行等の手続	不可 (42条1項参照)	中止（25条3項） (42条2項本文参照)
滞納処分	不可 (43条1項参照)	続行（25条3項の反面解釈） (43条2項参照)

柔軟な処理

- 一定の範囲に属する強制執行等又は国税滞納処分を包括的禁止命令の対象から除外することができる（25条2項）。
- 禁止命令の変更・取消しができる（25条4項）。
- 中止した手続を取り消すことができる（25条5項）。
- 債権者に不当な損害を及ぼすおそれがあると認めるときは、当該債権者に限り当該包括的禁止命令を解除することができる（27条1項）。

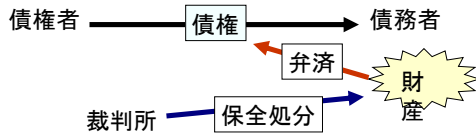
包括的禁止命令の効力発生時期（26条2項）

- 裁判書が債務者に送達された時に効力が生ずる。
- 包括的禁止命令を変更し、又は取り消す旨の決定も同じ。

時効の停止（25条8項）

包括的禁止命令により強制執行等又は国税滞納処分が禁止されている破産債権等については、包括的禁止命令が効力を失った日の翌日から2月を経過する日までの間は、時効は、完成しない。

債務者の財産に関する保全処分（28条）



裁判所は、

- 利害関係人の申立てにより又は職権で、
- 破産手続開始の申立てにつき決定があるまでの間、
- 債務者の財産の処分禁止の仮処分その他の必要な保全処分を命ずる。

T. Kurita

19

保全処分の例

- 破産財団に属する個々の財産の仮差押え・仮処分（登記・登録につき、259条1項・262条参照）
- 債務者に対する財産の一般的処分禁止命令
- 債権者への弁済禁止（28条6項）
- 債務者（破産者）の債務者に対する弁済禁止
- 従業員による無断売掛金回収禁止（従業員の代理権を制限する処分である）
- 帳簿の執行官保管
- 借財禁止

T. Kurita

20

保全管理命令（91条）

- 債務者が法人である場合に、包括的な財産の処分禁止が必要なときは、これによる（96条・47条参照）。
- 保全管理人が選任され、その旨の登記がなされる（257条4項）。

T. Kurita

21

破産手続開始の申立ての取下げの制限（29条）

- 破産手続開始の申立ては、開始決定前に限り、取り下げることができる。
- 中止命令、包括的禁止命令、保全処分等がなされた場合には、取り下げには裁判所の許可が必要。中止命令等の制度の悪用の防止のためである。

T. Kurita

22

破産手続開始申立ての審理

- 実務では、書証と申立人および債務者の審尋だけで審理を終えるのが通常のものである。
- 8条2項により、職権で証拠調べをすることもできる。

T. Kurita

23

審理事項（30条1項）

- 債務者の破産能力 証明が必要。
- 破産手続開始原因となる事実 証明が必要。
- 申立人の申立適格 手続的要件である。破産債権者が申し立てた場合に、破産債権を有することの証明が必要か否かについて、争いがある。
- 費用の予納のあること 手続的要件である。
- 破産手続開始を妨げる事由が証明されないこと

T. Kurita

24

自己破産の申立ての場合についての注意

- 自己破産の場合でも、破産手続開始原因の証明は必要である。
- 支払能力のある債務者が免責により債務を免れようとするのは、不当である。それを阻止する第一の関門は、この要件の証明である。

T. Kurita

25

破産手続開始申立てについての裁判

1. 条件が満たされる場合には、開始を決定する。
 - 主文：「債務者について破産手続を開始する」
 - 開始決定書には、30条2項の破産手続開始決定の効力の発生時点となるべき年月日時を記載する（規則19条2項）。
2. 条件が満たされない場合には、申立て棄却の決定をする。33条2項に注意。
 - 不適法として棄却（却下）する、又は
 - 理由なしとして棄却する。

T. Kurita

26

同時処分（31条）

- 破産財団をもって破産手続の費用を支弁するのに不足すると認めるときは、開始決定と同時に、破産手続廃止の決定をする（216条）。
- そうでなければ、破産手続を進めるために、開始決定と同時に次の処分をする。
 1. 破産管財人を選任する（31条1項柱書き）。
 2. 次の事項を定める（31条1項、規則20条1項）
 - a. 債権届出期間（1号）
 - b. 財産状況報告集会の期日（2号）
 - c. 債権調査期間または債権調査期日（3号）

T. Kurita

27

一括期日

- 個人破産の管財人選任事件を例にとれば、次の事項のための期日は、同一日時に定められることが多い
 1. 財産状況報告集会
 2. 破産債権の一般調査
- 事件によっては、次の期日も併合される
 3. 廃止意見聴取
 4. 計算報告

T. Kurita

28

期間・期日の指定の保留

- 財産がないとまでは言い切れないが、財団不足のおそれがあると判断される場合には、破産管財人を選任して破産財団の換価を進めるが、破産債権の届出等は後にするのが合理的である。
- 債権届出期間と債権調査の期日・期間は、財団不足のおそれがなくなるまで定めずにおいて、そのおそれがなくなってから定めることができる（31条2項・3項）。

T. Kurita

29

財産状況報告集会の省略（31条4項）

裁判所は、さまざまな事情を考慮した上で、財産状況報告集会を招集することが相当でない認めるときは、その集会の期日を定めないことができる（31条4項）。

1. 債権者の数
2. 債権者の地理的な散在状況
3. 集会を開く費用
4. 集会における報告に代わる報告方法など

T. Kurita

30

大規模破産事件における各種通知等の省略 (31条5項)

31条5項各号の通知あるいは呼出しを省略することができる。

1. 既知の破産債権者の数が1000人以上であり、
2. 裁判所が相当と認めるとき

通知等を省略したことの周知 (32条2項)

- 31条5項により上記の通知等を省略することを決定した場合には、そのことを破産債権者・議決権者に周知させるために、破産手続開始決定の公告をする際にあわせて公告する (32条2項)
- 破産債権者・議決権者がそれらを簡便に知る方法 (日刊新聞紙、インターネット) を用意しておくことが望まれる。(規則20条3項)

付随処分

- 32条1項所定事項の公告
- 32条3項に規定された者への通知 (公告事項の通知)
- 監督庁等への通知 (破産規則9条1項)。金融機関の破産の場合には、その監督庁への通知 (金融更生特492条)
- 破産手続開始の登記・登録 (257条、258条)

破産手続開始の主要な効果

- 各種資格制限 (他の法令で定められている)
- 居住制限 (37条)、説明義務 (40条)、財産開示義務 (41条)
- 強制執行等の効力の消滅等 (42条以下)、訴訟手続の中断 (44条)
- **財産の管理処分権が破産管財人に専属する** (78条1項)

破産管財人の選任

- 裁判所が管財人になるべき者の同意を得て、破産手続開始決定の同時処分の一つとして、選任する (74条)。
 1. 通常、弁護士が選任される。法人も管財人になることができる (74条2項)
 2. 一人又は数人の者を選任する (31条1項本文)
- 裁判所書記官は、破産管財人に対し、その選任を証する書面を交付する (規則23条3項)。

破産管財人の職務-1

- 財産の整理
 1. 財産の管理 (79条)
 2. 郵便物等の管理 (81条以下)
 3. 財産状況の調査 (153条以下)
 4. 破産財団に関する訴訟の追行 (80条)
 5. 契約関係の整理 (53条以下)
- 財産の増殖
 1. 否認権の行使 (160条以下)
 2. 法人の役員の責任の追及 (177条以下)

破産管財人の職務-2

- 換価 (78条・184条以下、規則56条以下)
- 弁済
 1. 債権確定への関与 (115条以下)
 2. 配当 (193条以下)
 3. 財団債権の弁済 (2条7項・148条以下)
- その他
 1. 免責についての調査 (250条以下)
 2. 労働債権を有する者への情報提供 (86条)

T. Kurita

37

破産管財人の監督・コントロール(1)

- 破産裁判所によるコントロール
 1. 破産管財人は裁判所の監督に服す (75条1項)
 2. 解任 (75条2項)
- 債権者委員会
 1. 意見の陳述 (144条3項・145条2項)
 2. 破産管財人の報告義務 (146条)

T. Kurita

38

破産管財人の監督・コントロール(2)

- 破産債権者
 1. 破産管財人の計算に対する異議 (88条4項・89条3項)
 2. 解任申立権 (75条2項)
- 破産者
 1. 破産管財人の計算に対する異議 (88条4項・89条3項)
 2. 解任申立権 (75条2項)

T. Kurita

39

破産管財人の権限 (78条2項)

重要な財産処分行為については、破産裁判所の許可が必要である (78条2項)。

- 金額に依存しない法定重要行為 1号から6号
- 金額に依存する法定重要行為 7号から14号。
破産規則で定める額 (規則25条により100万円) 以下の価額を有するものに関するときは、裁判所の許可は必要ない (78条3項1号)
- その他裁判所の指定する行為

T. Kurita

40

裁判所による許可不要指定

- 7号から14号の行為については、法律の規定によれば裁判所の許可が必要な場合でも、裁判所は、事件の特質、破産管財人の資質、経済状況等を考慮して、許可不要の指定をすることができる。
- 許可不要の指定がされているものについては、許可は不要である (78条3項2号)。

T. Kurita

41

営業又は事業の譲渡

- 財産の処分は、複数の財産が有機的連関を保った状態である方が、高額で売却できることがある。ときには、顧客関係、労働関係を含めて一括して譲渡することもある。営業または事業の譲渡である (3号)。
- これを許可するに当たっては、裁判所は労働組合等 (32条3項4号) の意見を聴かなければならない (78条4項)。

T. Kurita

42

職務執行

- 管財人が複数いる場合には、原則として共同で職務を行う(76条1項本文)。
- 裁判所の許可を得て、それぞれ単独にその職務を行い、又は職務を分掌することができる(76条1項ただし書)。大規模破産事件では、この必要が高い。

T. Kurita

43

代理人の選任

破産管財人は、自己の責任で、代理人を選任することができる。

- 包括的な代理権を有する**破産管財人代理** 必要があるときは、裁判所の許可を得て、その職務を行わせるため、自己の責任で一人又は数人の破産管財人代理を選任することができる(77条)。
- 特定事項についての**個別代理人** これは、裁判所の許可なしに選任できる。

T. Kurita

44

警察上の援助

- 職務の執行に際し抵抗を受けるときは、その抵抗を排除するために、裁判所の許可を得て、警察上の援助を求めることができる(破産法84条)。
- 破産管財人の職務執行は、刑罰により保護されている(破産法272条)。

T. Kurita

45

破産管財人の注意義務・忠実義務

- 民事上の責任 破産管財人は、善管注意義務を負う(85条1項)。義務違反の場合には、損害賠償義務を負う(同条2項)。
- 刑事上の責任 破産管財人・破産管財人代理が自己若しくは第三者の利益を図り又は債権者に損害を加える目的で、その任務に背く行為をし、債権者に財産上の損害を加えたときは、10年以下の懲役若しくは1000万円以下の罰金、又はこれの併科に処せられる(267条)。そのほかに273条も参照。

T. Kurita

46

破産管財人等の報酬

- 破産管財人・破産管財人代理は、裁判所が定める報酬を受けすることができる(87条1項)。
- 破産管財人・破産管財人代理の報酬債権は、148条1項2号により財団債権となり、共益費用の一部として他の財団債権に優先する。

T. Kurita

47

破産管財人の任務の終了

任務終了原因	任務終了後の破産財団所属財産の管理者
破産手続の終了(破産決定の取消・破産廃止)	破産者
解任・辞任・死亡	後任の破産管財人

T. Kurita

48

解任と辞任

- 解任 破産管財人が破産財団に属する財産の管理及び処分を適切に行っていないとき、その他重要な事由があるときは、裁判所は、破産管財人を解任することができる（[75条2項](#)）。
- 辞任 破産管財人は、正当な理由があるときは、裁判所の許可を得て辞任することができる（[規則23条5項](#)）。

T. Kurita

49

計算報告とその承認

- 破産管財人の任務が終了した場合には、破産管財人は、遅滞なく、計算の報告書を裁判所に提出しなければならない（[88条1項](#)）。
- 破産管財人の死亡により任務が終了した場合には、後任の破産管財人が計算報告書を作成して、提出する（[88条2項](#)）。

T. Kurita

50

破産債権者・破産者への報告

- 債権者集会の開催（[88条3項](#)） 債権者集会の期日と計算報告書の提出日との間には、3日以上の期間を置かなければならない（[88条5項](#)）。
- 書面による計算報告（[89条1項](#)） 計算報告書の提出があった旨及びその計算に異議があれば一定の期間内にこれを述べるべき旨を公告する（[89条2項](#)）。

T. Kurita

51

計算報告に対する異議と承認

- 破産債権者等は、
 1. 債権者集会が開催された場合には、期日において異議を述べ、
 2. 書面報告の場合には裁判所が定める異議申立て期間内に異議を述べる（[88条4項](#)）。
- 異議がなければ、計算は承認されたものとみなされる（[88条6項](#)・[89条4項](#)）。

T. Kurita

52

開始決定に対する不服申立て

- 破産手続開始申立てについての裁判に対しては、即時抗告ができる（[33条](#)、[民訴法332条](#)参照）。
- 抗告権者は、その裁判により不利益を受ける関係人である。
 1. 申立認容の裁判（破産手続開始決定）に対しては、破産者・取締役・債権者。株主については、見解が分かれているが、肯定してよい。
 2. 申立棄却の裁判に対しては、申立人・債権者。
 3. 申立てを却下する裁判に対しては、申立人。

T. Kurita

53

即時抗告期間

[最決平成13年3月23日](#)（旧法事件）

- 決定の公告のあった日から起算して2週間であり、同決定の公告前に送達を受けた破産者についても同じである。
- 破産決定の公告前に送達を受けた破産者は、公告前でも即時抗告することができる。

T. Kurita

54

執行停止の効力（民訴法334条）はない

- 破産手続開始決定の効力は、決定の時から生ずる（30条2項）。
- 即時抗告が提起された場合でも、破産手続開始決定の効力を存続させないと破産手続が円滑に行われない。

T. Kurita

55

破産手続開始決定の取消し

- 抗告審が破産手続開始決定を取り消す裁判をし、それが確定すると、破産手続開始決定が遡及的になかったことになる。各種の資格制限も消滅し、財産の管理・処分権は債務者に回復される。
- ただし、管財人が破産手続開始決定の取消しまでになした破産財団に関する行為は、取引の安全のために、その効力を保持する。管財人は残務整理として財団債権を弁済する。

T. Kurita

56